「家族への健康証明書」

山野　将史

30 歳を過ぎしばらくした頃、会社の健康保険組合から人間ドックの案内が届いた。

『30 歳以上の方。人間ドックの補助を受けれます』

社会人になって早七年余り。ありがたいことに、私はこれまで大きな病気や怪我もなく至って健康に過ごしてきた自負がある。人間ドックも無縁かと考えていた。

ただ遠い故郷の九州に暮らす両親・姉に話の種でも蒔こうかと、『人間ドックの補助』について家族 LINE に投稿した。

意外にもいち早く反応したのが、既読スルー常習犯の父であった。

「人間ドックは年に一回受けた方が良かよ」

普段母からは「栄養はきちんと摂っているか」「ちゃんと眠れているか」などの心配する LINE が頻繁に届くが、父からそんな言葉を聞いた試しがなかったため、この反応には当初相当面食らってしまった。

そして同時に、私が小学六年生のナイトウォーキングの日の事を思い起こさせるのであった。

そのイベントは夜の 19 時頃に学校の中庭に集まり、保護者と一緒に往復 2 時間程かけてイルミネーションが有名な住宅街を見て周るというイベントである。授業参観や部活の大会など、基本的には毎回母のみの参加だった。当時父は会社の管理職として朝早くから夜遅くまで、休日もなく働いていた。

そんな父が珍しく母と一緒にナイトウォーキングに参加すると言うのだ。

私は口では「忙しいなら別に出なくても良いけど」と言いつつ、父も参加するナイトウォーキングを密かに楽しみにしていた。

当日の夕方。突如家に電話が掛かってきた。どうも父が救急車で運ばれたとのことだ。母は「後から行くから、先に学校へ行っていて」と言い残し病院へ向かった。多少の心配はあったが、母の言いつけ通り先に小学校で待つことにした。

しかし開始五分前になっても母が現れる事はなかった。直前になり担任が声を掛けてきた。「山野君のご両親来れなくなったって電話があったけどどうする？」

正直薄々はこうなるのでは無いかという不安はあった。しかし実際にその言葉を聞いた瞬間、じわじわと目の奥から熱いものが込み上げてきた。行かずに帰るという選択肢もあったが、それは何かに負けたような気がしたので、両親がいなくともナイトウォーキングには参加することにした。

幸い仲の良い友人とその保護者に同伴したため、ある程度の寂しさは紛らわすことができた。ただ、子供ながらに私だけ両親がいない状態で参加したナイトウォーキングはある種の惨めさも感じていた。

家に帰宅しても両親は帰っておらず、その日は一人の家の中で就寝した。

朝起きると、台所で母が朝食を作っていた。昨日夜中に帰ってきたらしい。母によると父は脳梗塞で倒れ、救急車で運ばれたとのことだ。母は神妙に「最悪も覚悟しといてね」とだけ言った。

その時の私の感情を、今となってはうまく思い出せない。

幸い一命は取り留めたが、術後しばらくは言葉がうまく出てこないようだった。自宅から離れた病院で入院していたため、週に一,二度のお見舞いだった。

そして何度目かのお見舞い。父が言葉を取り戻してから、私が最初に聞いた言葉は「ナイトウォーキング、ごめんな」だった。

幸い父は長期のリハビリの末、社会復帰を果たした。今になってよくよく話を聞いてみると、それ以来人間ドックを受けるようにしていたとの事だった。

そんな父からの「人間ドックは年に一回受けた方が良かよ」という言葉を受け、私も年末に人間ドックを受けることにした。せっかくだからと、一泊二日温泉宿付きのコースにした。ゆったりとした検査着に着替え、宿泊者専用ラウンジで特保の健康茶を飲みながら検査の順番を待った。病院内の様々な場所へ行きつつ、自分の体内を検査する様はさながら遊園地のアトラクションのようだった。

人間ドック二日目の午前中に医師の面談と保健指導。若干悪玉コレステロールの値が高い以外は全て正常値だった。

結果を両親に伝えると「食生活気をつけないかんよ」と言いつつも、どこかほっとした様子だった。

人間ドックで病気が見つかれば、それはもちろん意義のあることだ。しかしそれ以上に病気が見つからなかったという結果は、遠く離れた家族へ向けた何よりの健康証明書になる。

次の年末は、今年よりも悪玉コレステロールを減らした健康証明書を持って、実家に帰りたいところだ。